



Japan Society of
Youth and Adolescent Psychology

News Letter

第 62 号 2013 年 10 月 18 日
発行：日本青年心理学会事務局

■ 目次

<特集>職業選択や就職活動から見えてくる今どきの青年

高橋南海子：いかに社会との接点を持たせるか？

菰田 孝行：医師という職業の選択から見えてくるもの

矢崎裕美子：今どきの学生は「フォロー」されたがる？

杉本 英晴：現代青年が志向する“それなり”の職業選択

新見 直子：青年の発達と進路選択

<書評>

浦上 昌則：梅崎 修・田澤 実(編著)『大学生の学びとキャリア：入学前から卒業後までの継続調査の分析』

下村英雄(著)『成人キャリア発達とキャリアガイダンス：成人キャリア・コンサルティングの理論的・実践的・政策的基盤』

<広報>

事務局からのお知らせ

<特集>職業選択や就職活動から見えてくる今どきの青年

大学で義務化されるなど、近年、キャリア教育の重要性が高まっています。では具体的にどのような教育が必要なのでしょう。それを考える手がかりとして、まず『現実の青年はどのように職業選択や就職活動をしているのか』を知っておきたいと思いました。

そこで今回の特集では、青年の「職業・進路選択」「学校から職業への移行」「キャリア発達」に関する研究をされている会員の方々に、これらのテーマに関する研究を行う中で、あるいは、就職活動や職業選択をしている青年の実態を見聞きする中で感じられる今どきの青年について自由に語っていただきました。ご執筆いただいた先生方、貴重なご意見、ありがとうございました。

(担当：長峰伸治・中間玲子)

いかに社会との接点を持たせるか？

高橋南海子(明海大学 総合教育センター)

社会人1年目の方に、就職活動から入社初期までの経験についてインタビューをしたことがあります。「サラリーマンは雑多な集団」「単なる目上の人」と見ていたのが、就職活動を通じて「皆すごい人たち、輝いている」「色んなことを考えている」と思うようになったという回答が印象的でした。大人が「今どきの学生」と一括りで見ると、学生も大人を一括りにし、対極にある存在としてネガティブな印象を抱いていることが伺えました。それが就職活動により、個で捉え、ポジティブな面が見え、自分も社会の一員だと立ち位置が変わり、積極的に関わり始める、という変化が多くの回答に顕われており、興味深いものでした。就

職活動は学校と社会をつなげる成長の機会だと思われました。

では、それ以前の学生はどうでしょうか。私は現在、学部のキャリア教育を担当していますが、授業開始時に学生が持つ社会のイメージは押しなべてネガティブなものです。「厳しい、辛い、忙しい、失敗が許されない、つまらない、規制される、疲れ、我慢、生活のため」など、社会に対する不安や恐れ、希望を持ってない気持ちが伝わってきます。それも無理のないことで、彼らは社会との接点がとても少ないし、身近な大人とでも、働くことについて語る機会は殆どありません。リアリティのある情報が入らない中、日常的に見聞する断片的、表面的な情報を素直に信じ込んでいる節があります。しかもこの考えはかなり根強く、教室内の活動だけではあまり変わりません。これに対し、企業への取材、社会人との対話、インターンシップへの参加などの、社会と接点を持つ活動は、時間は短くとも、教室活動の何倍ものインパクトを彼らに与えます。リアリティがある、その人でしか語れないようなことを学生は敏感にキャッチし、素直に反応します。将来を考える目や行動に変化が見られます。だから、規模の大小はあれ、大人と仕事の話をする機会を創出することは、キャリア教育担当の重要な仕事だと感じています。

とはいえ、教室外の活動には消極的。社会人と接点を持つ過程を恐れたり、億劫がったりする。そんな彼らをその気にさせるのは容易ではありません。彼らをいかに「社会と接する気持ちにさせる」か、「行動させる」か。ここに腐心して日々取り組んでいます。

医師という職業の選択から見えてくるもの

菰田孝行（東京医科大学）

縁があって医科大学にて仕事をさせていただいている。医学部医学科は、ご承知の通り医師養成を目的とする6年制の学科で、最終学年末には医師国家試験の関門が待ち構えており、入学時点で医師という職業決定がなされている点で、特徴的な学科であるといえるだろう。

機会を得て、医学生及び卒業後の研修医（医師国家試験合格後に2年間の臨床研修が義務付けられており、その期間の医師）に、医師という職業選択とライフコースの変遷について、継続的に面接調査を実施している（詳細な結果については、改めて報告させていただく）。

その中で医師への志望動機を尋ねた項目に着目すると、①親や親族等の医院の継承のため、②専門職の中から選択した、③成績が良好で周囲の勧めにしたがった、の大きく3つの理由に分類される。命にかかわる仕事としての使命感、などのヒューマニティな動機は、私の調査の限りでは少数派であった（主な調査対象者が首都圏の私立医大の在学者と出身者であり、もともと医師の子弟が入学する割合が高いというバイアスがある）。

専門職という観点からみると、文系なら弁護士、理系なら医師が志望で、理系を選択したから医師になったというパターンがある。専門職として安定的な、総じて社会的地位も高く、比較的收入のよい職業として、医師という職業が選択されている現状が浮かび上がってくる。

報道等で医師の「偏在」が社会問題とされている。この偏在には、医師が都市部に集中する「地域の偏在」の問題と、産婦人科などのリスクの高い診療科の医師になることを避ける「診療科の偏在」の2つの意味を含んでいる。リスクの低い診療科の医師として、都市部で安定的な生活をおくることを理想とする意識が垣間見える。

医師の職業選択をそのまま一般化することができないのは当然であるが、医師としての職業を選択する志向と一般学生が職業を選択する志向は、似ている部分もあるのだなと感じたのである。将来的なリスクの少ない、身の丈に合った就職先を選択する志向は、現代の若者の職業選択の特徴として、指摘できるのではないだろうか。

今どきの学生は「フォロー」されたがる？

矢崎裕美子（日本福祉大学）

この原稿の依頼をいただいたとき、私は「今どきの学生」にどの程度触れているのかなと振り返った。そして、普段接する学生は「今どき」という母集団に適したサンプルなのか、などと考えているうちに、普段の研究対象者の抽出が適切なのかというところにまで至り、深みに嵌ってしまいそうになった。そういえば、大学から社会に移行するあたりの青年には直接関わらないようになって久しい。現在の仕事の中心は、初年次教育やFD活動を推進することであり、関わる学生も1、2年生や付属高校生、それも断片的に、である。私の抱く青年像はそうした学生たちに対する印象や、研究を通して得られたものである。

以前、内定獲得後から入社までの間に企業が行う内定者フォロー（内定者懇親会やグループワーク等の研修）が学生の不安に及ぼす影響を調べた。その際、「そもそも、学生は内定者フォローを望んでいるのか？」と思い検索したところ、72.2%の学生が「望んでいる」と回答したという結果があった（2011年卒マイコミ新卒内定状況調査）。これには少々の衝撃を受け、以来「フォローされたがる」青年像が形成された。私自身が学生だった頃（2000年頃）の感覚では30%程度かと思っていたからだ。しかし、学生と接する日常を振り返ってみると、学生の一部が、彼らの諸活動に教員が積極的に介入するのを望むのも、この結果と似たものなのだろうか、と思うことがある。自己紹介を求めれば「人と接するのは好きなんです、人見知りなのでぜひ話しかけてください」と言ったり、大学生活での違和感があるとすれば何ですか、という質問に「先生が学生にあまり近づいてくれないこと」と答えたり…。

他者からのフォローを望むことが不安の高さや自信のなさに反映される受身的なものだとすれば、「今どき」の青年にとりわけ見られる特徴でもない気がする。ただ、学生を取り巻く環境は、以前に比べてフォロー要請の表出を受け入れやすくなったと思われる。授業やオリエンテーションでは主体性を求める一方で、フォローもする現状は、学生にとっては矛盾したメッセージなのかもしれない。

現代青年が志向する“それなり”の職業選択

杉本英晴（中部大学人文学部）

「男は職場、女は家庭」。十数年前、私が学生だった頃、こうした価値観が根強く残っていたように思う。価値観多様化の時代とは名ばかりで、なぜ職業選択においてそうした画一的な価値観に縛られる必要があるのか理解に苦しんだことを今でもよく覚えている。

現在、学生と関わる中で「男は職場、女は家庭」という価値観をもとに職業選択を行う学生は少ないように感じる。「中小企業よりも大企業への就職」、「地方よりも都市での就職」といった価値観もしかり。個々の価値観が特定の制限をもたらしことを勘案すれば、現代青年の職業選択は以前と比べ制限が少なくなり、より「自由な」選択が可能となったといえよう。

しかし、「自由な」職業選択が可能な環境であるにもかかわらず、“よりよい”労働環境を得るための努力をする学生が少なくなったように感じる。仕事を持つことや家庭を築くことなど将来を展望すると、就職活動中の努力は“よりよい”労働環境・家庭環境へとつながるだろう。しかし、こうした“よりよい”職業選択を志向する学生は少なく、“それなり”の職場から内定をもらえれば満足する学生が非常に多いように思われる。

これまでの職業選択研究では、こうした“それなり”の職業選択は、自信のなさ、失敗経験、妥協・諦めなど個人のネガティブな要因から説明が行われてきた。しかし、“それなり”の職業選択を志向する学生と話してみると、そうしたネガティブさを感じることはあまりない。むしろ、彼らの多くは「地元」の居心地の良さなど安心できる生活環境を維持するため、積極的に“それなり”の職業選択を行っているという。つまり、“それなり”の職業選択は、彼らにとって“よりよい”職業選択なのかもしれない。

こうした事例は一部の事例であり、決して一般化できるものではない。しかし、「居心地の良い」生活環境の維持を重視する現代青年を理解することは、現代青年の職業選択における新たな一面を見出すことにもつながるだろう。

青年の発達と進路選択

新見直子（広島文教女子大学）

青年期の発達というとアイデンティティの形成が重要な発達課題として頭に浮かぶ。また、キャリア発達過程では、進路選択や就職が青年期の課題として挙げられている。青年期におけるアイデンティティ形成と進路選択に関連があることは、多くの実証研究において証明されてきた。教員として進路選択に取り組む学生と接する中で改めて両者の関連の強さを感じることがある。たとえば、就職活動において多くの学生が自己分析に取り組んでいる。この自己分析が進まないという学生の話をきくことがある。就職活動における自己分析では、自分が過去に何をし、そこから何を得たのか、現在の自分にはどのような特徴があるのか、将来的にどのような人物像を目指すのか等の情報を整理していく方法が多くの書籍で紹介されている。この方法を参考にすると、おそらく先のような学生は、自分自身と向き合い自分に関する情報を客観的に収集し、整理していく作業に難しさを感じているのではないかと思われる。

進路選択や就職活動の際には、自分に関する情報の他にも職業や企業等の多様な情報収集が行われる。それらの情報源は、就職活動向けの書籍、インターネット、キャリアセンターの職員など様々である。しかし、関係する情報を集めて終わりではなく、集めた情報を進路選択や就職活動に活用することが必要となる。特にはじめの頃は多様な情報を十分に活用しきれないこともあるようだ。それでも自分なりに工夫していく中で、自分の特徴や興味・関心等が整理され、将来やりたいこと等が徐々に明確になっていく。青年期におけるこのような発達プロセスの進行をどのように捉え、どのように支援することが有効なのかを検討することは、私にとって挑戦し甲斐のある課題である。

<書評>

梅崎 修・田澤 実(編著)『大学生の学びとキャリア：入学前から卒業後までの継続調査の分析』(法政大学出版局, 2013 年 4 月刊, ¥2, 940)

下村英雄(著)『成人キャリア発達とキャリアガイダンス:成人キャリア・コンサルティングの理論的・実践的・政策的基盤』(労働政策研究・研修機構, 2013 年 6 月刊, ¥2, 940)

浦上昌則(南山大学人文学部)

最近、青年期(大学生の時期)を生涯発達の観点、キャリア発達の観点からとらえるのに適した二冊の書が出版された。二冊をまとめたの書評というのはあまり適切ではないのかもしれないが、合わせて読むと興味深さは倍以上になる。幸い編集委員会からもお許しいただくことができたので、今回は二冊を取り上げさせていただく。

梅崎・田澤両氏による編著書は大学生(とその前後)を対象とした研究成果であり、下村氏によるものは成人期を対象とした研究成果である。両書を読み、そして多少の想像力を働かせれば、青年期から成人期にかけての発達の様相を概観することができるし、成人期から青年期(大学生)の在り方を検討する際の示唆も得られよう。

極めて個人的に梅崎・田澤両氏による書の目玉を紹介するなら、「キャリア・アクション・ビジョン・テスト」を作成している点を強調したい。これは、キャリアガイダンスの効果測定という文脈から作成された指標である。意識レベルの測定なので、心理学者にとってフレ

ンドリーであり、これを活用した研究も構想しやすいだろう。作成手順も拔かりなく、またアクションとビジョンという2因子、全12項目という構成も使いやすそうである。これを中心にひとつの研究群が形成されれば、大学（大学教育）というものを考える際の貴重な資料になるだろう。

また、こういったものが発表されれば、それに異を唱えるものも出てくるだろう。評者はこれを唯一の効果指標と評価しているわけではないし、そう評価されることを望んでいるわけでもない。むしろこれがひとつのメルクマールとして認識され、後発の研究が、理念レベル、現象レベルでそれに挑んでいくという様相になれば良いと考えている。

このような検討を行う際に役立つのが、下村氏による書である（下村氏は、「キャリア・アクション・ビジョン・テスト」の共同作成者でもある）。アクションやビジョンといった要因は、成人期のキャリア発達においてどのような位置を占めるものとなるのだろうか…。成人期のキャリアという視座からすると、大学教育の目指すべきものは何だろうか…。梅崎・田澤両氏による書の後に下村氏のものを読むと、そんな疑問が頭を駆け巡るだろう。

下村氏による書はそのタイトルからも推測できるように、支援を提言する姿勢が強い。しかしその根拠となる成人を対象とした調査結果（および調査内容）は発達の視点からも興味深い点が多い。その内容は多岐にわたるのでここでは紹介を省くが、本書のオビにもあるように、「七転八倒しつつも何とか生活を組み立てていくということこそ、成人キャリア発達の本質なのだと思う」という、研究者にとっては悩ましくも魅力的な知見が示されている。それゆえ、成人の意識を参考にどのように青年期を位置づけるかについては研究者間に大きな差異が生じそうで興味深い。

個人的意見を述べさせていただくなら、「生涯学習」をキーワードとしてとりあげたいと考える。就職はゴールではないし、その先に様々な予測できない要因が生じる。そういう人生を歩んでいかざるを得ない大学生には、今後も学び続けることが当然なのだと認識し、実践できる素養が必要なのではないかと想像するのである。こう考えると、先のアクションやビジョンと生涯学習の素養との関連はどのようなかという疑問も生じてきて……。このようなことを考えるのはとても楽しいのである。

もちろんこれらは別々の研究なので、比較検討はたやすくはないし厳密性にも欠ける。しかし、両書を踏まえこの時期の人間の発達についていろいろと想像を巡らすことは興味深い。またいずれの書もキャリアガイダンス・キャリア教育の視点持っているので、大学教育の内容やシステムについての示唆が得られる。大学生や大学教育の在り方に関心を持たれる会員には、2冊を合わせて読まれることをおすすめしたい。

<広報>

事務局からのお知らせ

Ⅰ. 2013 年度大会について

第21回大会につきまして、今回、大会発表論文集を同封しております。福島駅に隣接する交通の便の良い会場で開催されます。みなさまのご参加をお待ちし申し上げます。

開催場所：コラッセ福島（産業振興複合施設）

福島市三河南町 1 番 20 号 東北新幹線福島駅西口隣接

準備委員長：五十嵐敦先生（福島大学）

日程：2013 年 11 月 16 日（土）～17 日（日）

なお今回は、大会予約参加費等は郵便振替による入金ではないため、振替用紙を同封しておりません。大会発表論文集内の「大会参加の申込み方法」をご覧ください。銀行等からご入金ください。

II. 会費の納入状況のお知らせについて

タックシールに下記の記号を付記して会費の納入状況をお知らせしています。2012 年度分より年会費の額が変更されていますので、とくに 3 年以上の未納分がある方は、正確に計算を頂き（途中で「学生会員」から「正会員」に変更された方などは、その区分にも注意して）、納入していただきますようお願いいたします。

納入状況 A：完納しています。

納入状況 B：2012 年度までは完納しています。2013 年度の納入をお願いします。

納入状況 C：2011 年度までは完納しています。2012～13 年度の 2 年分の納入をお願いします。

納入状況 D：2010 年度までは完納しています。2011～13 年度の 3 年分の納入をお願いします。

納入状況 E：2009 年度までは完納しています。2010～13 年度の 4 年分の納入をお願いします。

納入状況 F：2008 年度までは完納しています。2009～13 年度の 5 年分の納入をお願いします。

*年会費 2012 年度以降：正会員 7,500 円 学生会員 4,000 円

2011 年度以前：正会員 5,000 円 学生会員 3,000 円

**振替口座：日本青年心理学会 00940-6-273417

→事務局の京都移転に伴い、変更になっています。旧払込票は使わないでください。

★ ゆうちょ銀行以外の銀行からの振り込み先

店名：〇九九店 当座預金 口座番号：0273417

※この当座預金口座には、銀行の ATM から入金ができます。

※ゆうちょ銀行に口座を持っていて、「ゆうちょダイレクト」の登録◆をしていればインターネット経由で入金できます（「ゆうちょダイレクト」からの振替は月 5 回まで手数料無料なので手軽&お得です）。

◆http://www.jp-bank.japanpost.jp/direct/pc/what/dr_pc_wh_index.html

※会費を納めていませんと、学会機関誌『青年心理学研究』は送付されません。また、『青年心理学研究』への論文投稿と掲載、大会での発表も、当該年度までの年会費を納めていることが条件となります。

【注意】大学の研究費から年会費を納める際には、**必ず、ご本人から**学会事務局宛て（seinenshinri@gmail.com）に、「何月（何日頃）に〇〇大学から××（お名前）分の会費が納入される」というご連絡をメール等にてお送りください。どの会員からの年会費納入かが記載されていないことが多く、適切に処理されない可能性があります。

III. 会員異動

IV. 送付先不明の方のお名前

日本青年心理学会事務局
The Japan Society of Youth and Adolescent Psychology
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
京都大学高等教育研究開発推進センター 溝上研究室内
TEL : 075-753-3047
E-mail : seinenshinri@gmail.com
Homepage : <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsyap/>
振替口座 : 00940-6-273417
口座名称 : 日本青年心理学会

お問合せはできるだけ E-mail でお願い致します。